



TITLE:

# ヘラートのクルト政權の成立

AUTHOR(S):

本田, 實信

---

CITATION:

本田, 實信. ヘラートのクルト政權の成立. 東洋史研究 1962, 21(2): 158-195

ISSUE DATE:

1962-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152609>

RIGHT:

## ヘラートのクルト政權の成立

本 田 實 信

は し が き

一 マリク・シャムスの出現

二 マリク・シャムスの活動

む す び

クルト家系圖

クルト家領域圖

は し が き

ヘラートは、今日ではアフガニスタン西北部の一地方都市にすぎないが、歴史の上から見ると、古代からよく知られた重要な町であつた。イスラム時代にはホラサン州の四大都市の一つとして、バルフ、メルヴ、ニシャプールとその繁華を競つた。チンギス・カンの西征の際、ヘラートも亦廢墟と化した<sup>1</sup>が、やがて奇蹟的に復興すると、そこに君

臨したのは土着のグル人貴族マリク・シャムス・アル・ディーン・ムハンマド・クルト Malik Shams al-Din Muhammad Kurt (以下マリク・シャムスと略稱)であつた。マリク・シャムスを第一代とするクルト家は、イランのモンゴル政權たるイルカン朝の支配下にあつたが、主家筋のイルカン朝より長い命脈を保ち、第八代ギヤース・アル・ディーン・ピール・フリーがチムールに滅ぼされ、その兒孫がサマルカンドで殺害されるまで(一三八九年)、イラン土着政權のチャンピオンであつた。クルト家滅亡後もヘラートは繁榮を續け、十五世紀にはテムール朝の首都としてイスラム文物の淵藪となり、チャガタイ文學興隆の地となつた。

イラン史とアフガニスタン史との両面にまたがつて展開したクルト家の歴史は、これまで多くの東洋學者の興味を

惹きながらも、この王家の性格を詳細に考察した者はなかった。<sup>(1)</sup>特にクルト家の勃興事情に就いては曖昧な點が多い。これは一つには史料制約のためであつた。クルト政権樹立の事情を探る手掛りを見出さんと、當該時代の第一等史料とも言うべきジュヴァイニーの「世界征服者の歴史」<sup>(2)</sup>（一二六〇）及びラシード・アル・デーンンの「集史」<sup>(3)</sup>（一二三〇）を繙く者は失望せざるを得ぬ。例えば、モンゴル軍によるヘラート市破壊に就いて、ジュヴァイニーはこれを記述すると約して遂に果さず、ラシードに至つてはヘラート市攻略の記事を全く缺いている。マリク・シャムス出現の事情に就いても、この二つの著名な史書からは奇妙な程断片的な記事しか得られない。

これまでクルト家の歴史を研究した者は、イスフィザリーの「極樂園」<sup>(4)</sup>を主要な典據としてきた。然しこのヘラート史は一四九二年に書かれたものであり、十四世紀初年に至るまでのクルト家に關する記事は盡くサイファイの「ヘラート史記」に負うている。

ヘラート人サイファイの「ヘラート史記」<sup>(5)</sup>はモンゴルのヘラート攻略から丁度一世紀後（一二三二—一二八二）に書かれたも

のであるが、町の古老からの聞書を含み、クルト家の歴史に關して他の史書には見られない、生彩のある記事を提供してくれる。<sup>(6)</sup>この年代記にもクルト家勃興に關する記事には、その年代にかなりの混亂・錯誤が見られる。それを正すには、ジュヴァイニー、ラシード等の史書を役立たせねばならぬ。

ジュヴァイニーが「世界征服者の歴史」を撰筆した頃、インドのデーリーで書かれたジャーズジャーニーの「ナーシリ物語」<sup>(7)</sup>、一二三八年に完成されたヴァッサーフの「邦土の分割と歲月の推移」<sup>(8)</sup>（普通に「ヴァッサーフの邦土の分割と歲月の推移」<sup>(8)</sup>と稱す）、「シースタン史」<sup>(9)</sup>にも看過すべからざる記載が見出される。チムール朝時代に編纂された史書のうち、前記のイスフィザリーの「極樂園」の他に、間々異傳を含むハーフィズ・イ・アブルの「地理書」<sup>(10)</sup>とファシーフの「ファシーフ摘要」<sup>(11)</sup>及びミールホーンの「清淨園」<sup>(12)</sup>、ホーンデミールの「道德の伴侶」<sup>(13)</sup>も參着されねばならぬ。

この小論は、主としてサイファイの「ヘラート史記」に據り、これまで著しく曖昧であつたクルト政権成立の事情を考えようとするものである。マリク・シャムスの出現に

は如何なる背景が存していたか。一方にモンゴルの苛酷な占領・統治政策の束縛を受け、他方に復興意欲に燃えるヘラート人やグルル人の興望を擔つて、マリク・シャムスは如何にして己の政權を樹立したか。その政權の基礎は何であつたかを、彼の活動を通じて考えてみよう。最近アフガニスタンにおけるモンゴル人の活動や、モンゴル人のインド侵犯の問題が論ぜられるようになった。<sup>(44)</sup> 拙論が十三世紀中葉のアフガニスタン史、乃至はイラン國史の一側面に少しでも光を投ずることができるとすれば、筆者の望外の喜びである。

#### 一 マリク・シャムスの出現

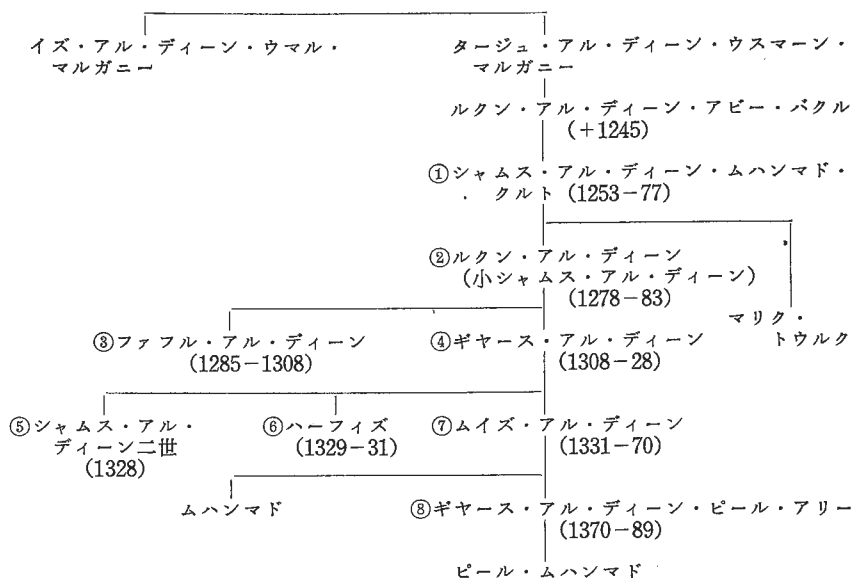
クルト政權の樹立者マリク・シャムスとは如何なる出自の者であるか。彼がモンケ・カーンより勅書を授けられて、ヘラートの統治を委ねられるに至つたのは如何なる事由によるのか。またヘラートを中心にどのような範圍の地域に統治權を行使することを許されたのであるか。

サイフィーの「ヘラート史記」によれば、マリク・シャムスの家系は次のように伝えられている。<sup>(45)</sup>

「グルル朝のスルタン、ギヤース・アル・ディーンの信任厚い宰相にイズ・アル・ディーン・ウマル・マルガニーなる者がいた。彼はスルタンの命令によつてホラサン州各地を己の子弟に授けた。自らはヘラートを取り、親族フサーム・アル・ディーン・アリ・ウマル・マルガニーにガルチスタンを與え、弟タージュ・アル・ディーン・ウスマーン・マルガニーにハイサル城を中心とするグルル地方を授けた。タージュ・アル・ディーンはグルル地方の支配權を己の子ルクン・アル・ディーンに傳えた。ルクン・アル・ディーンはこれをマリク・シャムスに傳えた。」

さてジュヴァイニーによれば、<sup>(46)</sup> 一二〇二年ホラズムシャー・ムハンマドがヘラートを攻撃した時、ヘラート城塞の主はイズ・アル・ディーン・マルガジーなる者であつたという。この者は「ヘラート史記」にグルル朝のスルタン、ギヤース・アル・ディーン<sup>(二二〇)</sup>の宰相であつたというイズ・アル・ディーン・ウマル・マルガニーと名前がよく似ているが、同一人物であるという確證はない。始めてハイサル城主に封ぜられたというタージュ・アル・ディーンに就いては、他の史書に關係記事を見出し得ぬ。その實在や活動狀況が確かに突止められるのは、マリク・シャムスの先代ルクン・アル・ディーンである。彼はハイサル城

## クルト家系圖



に據つていたが、モンゴル軍のグル人討伐の際逸早く降伏して、チンギス・カンより所領安堵の勅書を得た。ジュヴァイニーはこの勅書を親しく見ている。<sup>(94)</sup> また「ナシリー物語」の著者ジュズジャーニーも彼をよく知つていた。<sup>(95)</sup> ルクン・アル・ディーンはヘラート北方のバドギスに駐屯していたモンゴルの將軍ダイル・バートルの指揮下に入り、そのシースタン作戦、インド侵寇に参加した。<sup>(96)</sup>

ルクン・アル・ディーンとその後繼者マリク・シャムスとの續柄に就いて、サイファイのテキストにはその箇所のみ原缺して明かでない。<sup>(97)</sup> イスファイザリーはマリク・シャムスがルクン・アル・ディーンの子であるといひ、<sup>(98)</sup> ファシーフも兩者の父子關係を自明のこととしている。<sup>(99)</sup> なおイスファイザリーはマリク・シャムスの母はスルタン・ギヤース・アル・ディーンの娘であるともいふ。<sup>(100)</sup> 然しハーフィズ・イ・アブル、ミールホンド、ホンデミールはマリク・シャムスがルクン・アル・ディーンの子であるといふ。<sup>(101)</sup> ルクン・アル・ディーンとマリク・シャムスの名前、父稱、稱號を調べても兩者の續柄は明かとならぬ。<sup>(102)</sup> なおジュヴァイニーはマリク・シャムスを「Midat

の子ムハンマド」と呼び、ヴァッサーフはマリク・シャムスの父は Kart というグルル朝の有能な將軍であつたといつているが、この Midqat 乃至 Kart とルクン・アル・ディーンとがどのような關係にあるのか確め得ない。このようにマリク・シャムスがその先代ルクン・アル・ディーンの子であるのか、娘の子であるのか明確ではないが、マリク・シャムスがグルルのハイサル城主の家柄に生れたことは認めざるを得ぬ。(本稿に附したクルト家系圖では一應通説に従つて兩者の續柄を父子としておく) イスフィザリーンの記事を信じ得べきとすれば、マリク・シャムスの母はスルタン・ギヤース・アル・ディーンの娘であり、彼はグルル王家の血を引いていることになる。

さてグルル朝は十二世紀後半のギヤース・アル・ディーン(一二六三—一二六九)、シハブ・アル・ディーン(一二七三—一二八二)兄弟の治世間に、グルル地方のフィールーズ・マド・グー(兄弟の治世間に、グルル地方のフィールーズ・リと称さる)を中心に、セルジューク朝よりホラサン州の一部を掠取してヘラートを奪い、インドに屢々侵入して版圖を擴げたが、十三世紀になると、ホラズムシャー朝に壓迫され、この兄弟君主の死後その甥マフムードが立つたが、統一は

失われ、トルコ人奴隸出身の將軍たちが版圖内の各地で自立した。一二一五年マフムードも滅ぼされて、ヘラートを除くグルル朝の本土はホラズムシャー・ムハンマドの長子ジャラル・アル・ディーンの封地となつた。然しグルル人の活力が失われたわけではなく、チンギス・カンの西征軍を最も苦めたのは、今日のアフガニスタンの山險に據るグルル人であつた。上述したように、ルクン・アル・ディーンはモンゴル軍の侵入時グルル地方の一中心ハイサル城にあつてチンギス・カンに降つたグルルの豪族の一人であつたのである。後にマリク・シャムスがグルル人の興望を擔い、グルル朝の再興者と目されるに至つた一因は、彼がグルル貴族の出身であつたことに求められよう。

然し Malik(王の意) というマリク・シャムス以後のクルト家歴代の君主の世襲的な稱號が果してルクン・アル・ディーンの既にこれを持つていたものであるかどうか、やや疑わしく、マリク・シャムスの出現以前にクルト家が顯著な勢力を蓄えていたという證據はない。因みにクルトという名はルクン・アル・ディーンの名前に附せられて始めて出てくるが、その意味は未詳であり、その讀み方も Kart か

Kartか、未だ定説はない。ここではKartと讀んでおく。<sup>(80)</sup>  
 グールの一地方貴族にすぎなかつたマリク・シャムスが如何にしてヘラートを中心とする廣大な地域を版圖とする支配者となつたか。その契機となつたモンケ・カーンよりの勅書受領の経緯を次に考えてみよう。

ルクン・アル・ディーンは軍中に何時もマリク・シャムスを伴なつていた。その間にマリク・シャムスはモンゴルの慣習、制度に通曉した。ルクン・アル・ディーンが一二四五—六六年(A.H. 643)に亡くなると、マリク・シャムスがダイル・バートルの支援を得て、その後繼者となつた。<sup>(81)</sup>  
 サイフィーによれば、一二四六—七年(A.H. 644)マリク・シャムスはサリ・ノヤンのインド遠征に参加し、モンゴル軍のためにムルタン、ラホールの攻略に盡力したが、却つてモンゴルの部將達の嫌疑を蒙り、ダイル・バートルのもとに走つてその庇護を求めたという。然しサリ・ノヤンはモンケ・カーンによつてカシュミール、インド方面に派遣されたのであつて、サイフィーの話はこのままでは信じ難い。

マリク・シャムスが蒙古に赴き、モンケ・カーンより勅

書を授與されるに至つたことに就いて、サイフィーは要次のようにいう。<sup>(82)</sup>

「一二四七—八年(A.D. 689)ダイル・バートルが死し、その子ハルカト・ノヤンが後を繼いだ。彼はカラ・ノヤンと共にアフガニスタンのバラジュ、ランジュハーン(何れも位置未詳)を襲い、五百頭の駱駝と二百人の捕虜を得た。これを聞いたマリク・シャムスは、兩地の民は既に服屬して定められた額の税を納めているのに、何故このような舉に出たのかと詰責し、掠奪したものを返還させた。これがため彼とハルカト・ノヤン、カラ・ノヤンとの仲が不和となつた。二人の將軍はマリク・シャムスに對する讒訴狀をチャガタイ・カンに送つた。これを知ると、マリク・シャムスも部下をテギナバード(現在のカシダハル)に留め、二十騎を率いて蒙古に向つた。トルキスタンに着くと、チャガタイ・カンは既に亡く、エス・モンケが後繼者となつていた。マリク・シャムスはチャガタイ・カンの名臣ハバシュ・アミードに厚く遇され、その邸に二ヶ月滞在した。やがてモンケ・カーンとグユク・カン派との間に争が生じ、エス・モンケの家臣は四散し、ハバシュ・アミードもインドに走つたので、マリク・シャムスはモンケ・カーンのもとに赴き、その即位の當日カーンの宮廷に到着した。自分がホラサン州のグール地方から來た者で、父祖はチンギス・カンの勅書、牌子を恩賜されたと告げた。

一説によれば、マリク・シャムスはモンケ側に與し、グユク派

との戦にグルル兵二十騎を率いて奮闘し、この功を賞せられてモンケ・カーンより勅書を得た。」

「ヴァッサーフ史」にもサイフィーと略同様の記事が見出された。<sup>60</sup> 即ち、モンケ・カーンがグユク・カーン派を支持するチャガタイ・ウルスの一門と争つた時、マリク・シャムスは「チャガタイ側に」監禁されていたが、敵の眼を掠めてモンケ・カーンのもとに至り、チンギス・カンより授與された勅書を示し、これまでチンギス・カーン家に忠誠を盡し、ハイサル城とグルル地方とを治めていたことを告げ、モンケ・カーンより勅書と虎頭牌とを得たという。マリク・シャムスが蒙古に赴くに至つた直接の動機は、モンゴルの將軍達との確執に關して自己辯護をなすことであつた。己の庇護者マイル・バートルはチャガタイ家に屬する將軍であつた。従つてマリク・シャムスは先ずチャガタイ家に赴いたのであるが、中央の政情の動きを機敏に見とり、チャガタイ家に見切りをつけ、モンケ・カーンのもとに走つたのである。

さてジュヴァイニーによれば、<sup>61</sup> モンケ・カーンはイランの地の行政をホラサン總督アルグン・アカに委ね、彼に隨

從してモンゴルの宮廷にやつてきたイランの諸侯に夫々勅書と牌子を授けたといい、マリク・シャムスもその一人であつたという。この時ジュヴァイニー自身がアルグン・アカに從つてモンケ・カーンの宮廷に滞在中であつた。アルグン・アカがモンケ・カーンの宮廷に到着したのは、即位式（一二五一年）から十カ月後の一二五二年五月二日、任地（七月一日）に向つて出發したのは、同年十一月二十四日又は翌年の八月九月のことである。<sup>62</sup> 従つてマリク・シャムス等が勅書を得たのも、この期間中に求めねばならぬ。ジュヴァイニーがマリク・シャムスの先代ルクン・アル・ディーンに授けられた勅書を親しく見ることができたのもこの滞在中のことであろう。因みに彼が友人に勧められて「世界征服者の歴史」の執筆を思い立つたのもこの時のことである。サイフィーは、マリク・シャムスが蒙古に到着し、勅書を得、歸途に就いたのを、すべて一二四七年（A.H. 645）のこととしているが、モンケが即位以前にマリク・シャムスに勅書を授けたとは考えられぬ。従つて、この年代以後のサイフィーの記事は、約二十年間にわたつてずれを生じ、取扱に注意を要する。通説がマリク・シャムスの即位



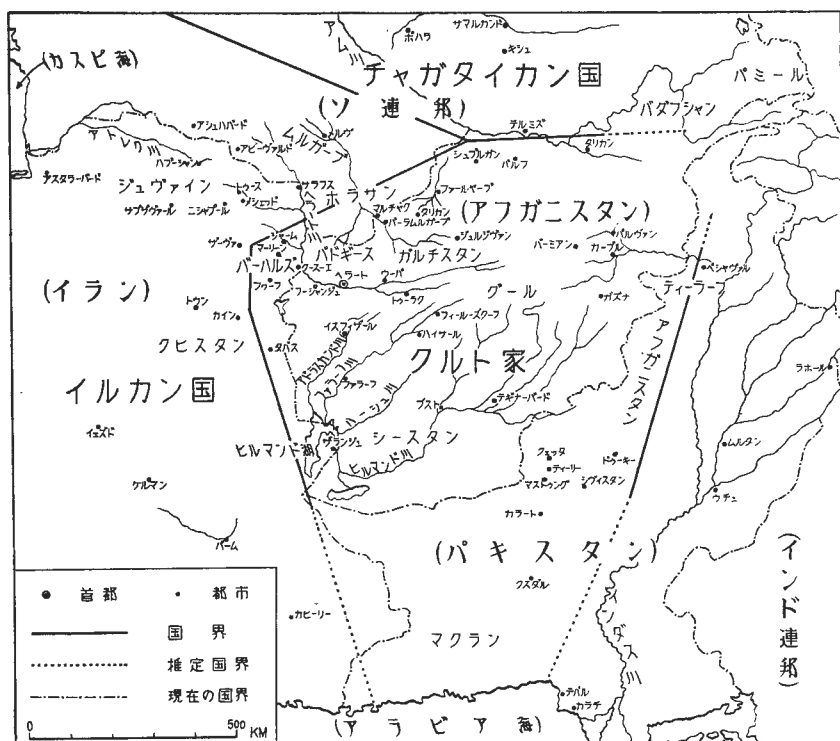
を A. H. 645 年とするのも訂正されねばならぬ。

マリク・シャムスはモンケ・カーンから授けられた勅書によつてどのような範圍の地域に統治權を行使することを許されたのであろうか。ジュヴァイニーが「ヘラート、シースタン・バルフ及びインドの境に至るまでの全占領地」といい、ヴァッサーフが「ヘラート、ニームルーズ(シースタンの)及びその附近の諸町村」といつている處から、略今日のアフガニスタン全域が彼に委ねられたことが察せられよう。サイフィーはマリク・シャムスに委ねられた地域を次のように詳しく述べている。

「ヘラート市 (Shahr-i-Harāt) とその附屬地——ジャーム (Jam) 、バーハルズ (Bahariz) 、クースヌーハ (Kusūya) 、ジャッゼ (Jazza) 、フーシャーンジュ (Fushanj) 、アーザーブ (Āzab) 、トゥーラク (Tulak) 、グール (Ghūr) 、フンイサル (Khaysār) 、フイルースターフ (Firūz-kūh) 、ガルチスタン (Gharichistan) 、ムルガーブ (Murghab) 、マルチャク (Marchag) 、ファールヤープ (Faryāb) 、アム川 (Ab-i-Āmūy) おび、イスフイザール (Isfizār) 、フアラーフ (Farah) 、シジスタン (Sijistan) 、テギナバード

(Taginābād) 、カーブル (Kabul) 、ティーラーフ (Tirāh) 、プシューテイスタン (Pushistan) 、アフガニスタン (Afghānistān) 、インダス河岸 (Shahr-i-Sind) とインドの境 (Hadd-i-Hind) まじ」。

これらの地名はヘラートを中心に略交通路に従つて列擧されており、あるものは町の名であり、あるものは地域の名である。今日の地理と考へ合わせて夫々の位置の比定を試みてみよう。ヘラート市、トゥーラク(ヘラートの東、方約一五〇軒)、アム川、ファラーフ(ヘラートの南、方約二二〇軒)、カーブル、インダス川、インドに就いては問題はない。ジャームは北流ヘラート川に注ぐジャーム川の流域をいい、その中心はプーチュカーンで、この町は現在のトルバト・イ・ジャーム(ヘラートの西北方約一九〇軒)に當る。バーハルズはジャームの南の溪谷で、その中心の町はマリーーンと呼ばれた。これは現在のシャフル・イ・ナウ(トルバト・イ・ジャームの西南方約四〇軒)に比定される。クースヌーエは、マリーーンと次に述べるフーシャーンジュとの中間にあつたと考えられるが、その正確な位置は未詳である。ジャッゼに就いては読み方も實は明かでなく、その位置も分らないが、サイフィーの書の他の箇所でもクースヌーエとフ



イ・シャンジュの間にその名が挙げられているので、位置はこの二つの町の中程に求められよう。フー・シャンジュはヘラートの西方一日程の地で、ヘラート川の南岸にあつた。現在のグリーニヤンに當る。<sup>(41)</sup> 次のアーザーブの位置は未詳。<sup>(42)</sup> ヘラートとトウーラクの間に求められようか。グリーニヤンは後に述べるように、今日のハザール都を指す。フイー・ルズ・クーフはグル朝の首都であつたが、その確かな位置を示す史料はない。ハザール都の中心タイワラがそれに當ると考えられている。<sup>(43)</sup> マリク・シャムスの父祖傳來の居城ハイサルに就いて、ハワースはFerrierの「旅行記」によつて、チャブ・ダラシの山麓、タイワラの東北方の城址に比定し、<sup>(44)</sup> シュプラー教授は「ヘラートの東南方約二〇〇料」にありと言つている。<sup>(45)</sup> 百萬分の一縮尺の英空軍地圖をみると Zarni の西南約二〇料の地点に Qala'eh Qaisar (東經六十四度十六分、北緯三三度十六分) という地名が見出される。Zarni は京都大學の岩村忍

教授等が稀代の珍本 Ziru Manuscript を得られた村である。私はこの Qaisar 城址こそクルト家の居城ハイサルに相違ないと考える。ガルチスタンはムルガープ川上流域を指す。今日ではこの地方をフィールズクリーフと呼ぶ。ムルガープはパロバミソス山脈に發源して北流し、メルヴの北方でカラクム砂漠に消失している内陸川に他ならないが、地名としては、バーラー・ムルガープを指すものと考えられる。マルチャク(小メルヴの意)はバーラー・ムルガープからムルガープ川に沿つて下ること約三五料の地點にある。ファールヤープはジュズジャン地方の中心地であつた。それはカイサル川東支流に臨むダウラターバードに比定される。イスフィザールはアスフザールとも呼ばれ、ヘラートの南、アドラスカンド川の畔りに位置し、今日ではサブザヴァールという。シジスタンはシースタンのことで、ヒルマンド川中・下流を指す。その首府はヒルマンド湖東岸のザランジュであつた。シースタンはニームルーズとも呼ばれたが、ヒルマンド川中・下流域はガラムシールともいわれた。テギナバードは今日のカンダハルに比定される。ティーラーフはベシャヴァルの南の山地帯を指す。

プシュティスタンは、サイフィーのテキストに BSTAN と綴られている。ジュヴァイニーはティーラーフと並べて BSTH (又は PSTH) という地名を擧げている。BSTAN は Pushistan (プシュト人の住地の意) と讀まるべきで、BSTH もこれに關係があるのではなからうか。アフガニタンはサイフィーの「ヘラート史記」に始めて現われ、「アフガン人の住地」の意である。アフガン人は早くからスレイマン山脈方面に住んでいたと考えられる。サイフィーはテギナバード(現在のカンダハル)の南方一帯、特にマストウングを中心とする地域をアフガニスタンと呼んでいるようである。なおアフガン人はグルル人と明確に區別されねばならぬ。これらの地名を交通地理の上から考えてみると、ヘラートを起點に、西北はヘラート川を下つてジャームに至り、東はヘラート川を溯り、一方はグルルの地を経てガズナに至り、一方はガルチスタンに通じ、東北はムルガープ川からアム川に達し、南はシースタンに至り、更にカンダハルから一方は南してアフガニスタンに向い、一方はカーブルに達する。これらの交通線を延長すれば、中國、中央アジアからイランに通ずる東西交通の幹線、南ロシア

とインドとを結ぶ南北の幹線につながり、然もマリク・シャムスに授けられた地域で、この兩幹線が交叉していることが分る。ここに見出される地域は、略今日のアフガニスタンの全土を蔽い、東北方面の境界は明かでないが、西と南に於いて夫々今日のイランとパキスタンにはみ出している廣大な範圍であり、それはまさにグル朝の舊領土に相當する。

ここで注意しなければならぬのは、マリク・シャムスに與えられたのはヘラート市であつて、その他の地域はヘラート市の附屬地としてであつたことである。グル人は若干の方言の差こそあれ、イラン人であつて、後のアフガン人とは區別されねばならぬが、然し中世のイスラム地理家たちはグルの地とホラサン州のヘラート市との地理的區分を明確にしており、兩者の何れか一方を他方に屬せしめてはいない。グルは、ヤークトが「ヘラートとガズナの間の地」というように、ヘラートの東及び東南、ガルチスタンの南のヘラート川上流域を指し、略今日のハザールスタンに當る。フィールズブーフを首都としたグル朝は一一七五—一六六六 (A. H. 571) ヘラートを占領したが、

一二〇六年にはこれをホラズムシャー朝に奪われた。ホラズムシャー朝においてもヘラート市はホラサン州に屬し、グルの地と行政區分を異にした。今やモンケ・カーンの勅書によつて、グルのハイサル城主マリク・シャムスにヘラート市が與えられ、ヘラート市がクルト政權の首都となつたことは、グル人がホラサン州に進出し、彼等がイラン文化の擔當者の役割を演ずることになつたことを意味し、この後のヘラートの歴史の展開に大きな意義を有することになつた。ここで我々はグル人シャムス・マリクの運命をヘラートの歴史に結びつけたモンゴル人の政策に就いて考えねばならなくなる。マリク・シャムスの出現以前にヘラート市はモンゴル人とのような關係にあつたか。

一二二一年春、ヘラートはチンギス・カンの第四王子トルイの指揮するモンゴル軍によつて、交戦七日の後に開城した。この時のヘラート市民の損害は割合輕微であつた。然るに同年末ヘラート人はトルイが任命した知事アブ・バクル・マルジャキ、司政官マンガタイを殺害して叛いたため、第二王子オゴタイによつて派遣されたエルチギデ

イ・ノヤンの六カ月半に及ぶ包圍攻撃を受けた。彼のヘラート市破壊は徹底的であり、ヘラートは全く見棄てられた町となつた。モンゴル軍はヘラートを始め、アフガニスタンの諸城市を次々と破壊したが、これは一つには土着グル人とホラズム軍との間に全き協調が望み得なかつたためである。前に言及したように、ホラズムシャー・ムハンマドがヘラートに入城したのは一二〇六年末のことであり、グル朝の全領土を奪つたのは一二一五年のことであつた。モンゴル軍の侵入時、ホラズムシャーの權威はこの地方で確立してはいなかつたのである。また考えてみると、チンギス・カンのレストランスオグザニア作戦は大成功で、掌を指すが如くに地理を諳んじ、ボハラ、サマルカンド兩市を立ち所に占領した。アム川以南のイラン及びアフガニスタンに於ける作戦は様相を異にし、目ざすホラズムシャー・ムハンマド、ジャラール・アル・ディーン父子を遂に捕捉し得なかつた。結果としては、ボハラ、サマルカンドが容易に復興し、以前にも増す繁榮を遂げたのに、ホラサン州やアフガニスタンの諸都市はモンゴル軍の無差別攻撃で甚しく荒廢し、バルフの如きは今日もなお廢墟のままであ

る。チンギス・カンがアフガニスタンの諸城市を破壊するのみで、確たる作戰計畫も占領政策も持たなかつたことは、却つてグル人をしてホラズムシャー朝支配の桎梏を脱し、彼等に復興すべき餘裕を與えることになつた。

エルチギデイ・ノヤンの軍がヘラートで殺戮・掠奪を擅にしていた間、近くの嶮岨な山中に難を避けていた者が十六人いた。彼等はモンゴル軍が立ち去つたのを確めると、山を下りて廢墟と化したヘラート市に歸つてきた。「ヘラート史記」の著者サイフィーはこの十六人衆全部の名前を擧げている。彼等の經歷は明らかでないが、その名前から推してヘラートの中以下の、むしろ下層の階級の工匠であつたと考えられる。その指導者には説教師シャラフ・アル・ディーンが選ばれた。然しこの十六人衆は殆んど掠奪團ともいふべきものであつて、ヘラートの復興作業に着手したという證據はない。例えば次のような話が傳えられている。モンゴル軍が各地の倉庫をすべて焼き拂つてしまつたので三年目になつても食糧は無く、十六人衆の一味はエジプトから中國に向う隊商をケルマンの野で襲撃して、五十人ばかりの商人を殺した。掠奪品の分配は一人當り、砂糖



一二三七八年 (A. H. 635) イズ・アル・ディーンはオゴタイ・カーンの勅書を奉じ、織物工たちを伴なつてヘラートに歸還すると、それまでここに頑張つていたシャラフ・アル・ディーンを長とする、かの十六人衆と協力して運河を掘り、小麥を蒔き、棉花の栽培をなした。翌年イズ・アル・ディーンはオゴタイの宮廷に赴いて己の家族の残つてゐる者を連れ歸らんことを乞うて許され、百戸を伴なつて歸途に就いたが、道中で病歿した。オゴタイは彼の子アミール・ムハンマドを改めてヘラート知事に任じ、ウイグル語に通じたカルグなる者を司政官に任じた。一二三九一四〇年 (A. H. 637) アミール・ムハンマド、カルグの一行はヘラートに到着し、復興事業に着手した。パン屋、料理屋、肉屋、鍛冶屋、八百屋、呉服屋、大工という七軒の店舗が郊外にできた。カルグはヘラート廳 (Divan-i Harat) を設け、徴税制度を整えた。彼の政治はかなり厳しく、一時シャラフ・アル・ディーンの一派と意見が衝突したこともあつた。然しカーンやバト・カンの處からはヘラートへの移民が送られ、運河の修復も進捗した。

これより先モンゴル軍がヘラート市北方のカルン城を

屠つた時 (一二三九年)、その地方の富人の子に十歳になるマジュド・アル・ディーン・カルユニ(以下マリク・マ・ジユドと略稱)がいた。アルスランというモンゴルの將軍に拾われ、蒙古に連れ去られた。後にアルスランがチオルマグーンのもとに使した時、これに隨從したが、サブザヴァールに達した時、同地にいた親戚の者たちによつて二千ディナールで贖われて引取られた。後にマリク・マジドはヘラート復興の様子を聞くと、バト・カンからカルン城復興の命令を受領しようと決心した。ヴォルガ河畔のバト廷に達して、首尾よく金牌二を得ると、一二四〇一年 (A. H. 638) ホラサン總督コルグズの後押しでヘラートに來たり、「私はカルン城復興のことでバト・カンのもとに赴いたが、カンは私をヘラート知事に任じた」と告げヘラートに居据つてしまつた。そして自らの政廳を設け、やがてアミール・ムハンマドを獨斷で罷免した。然しマリク・マジドは十六人衆の頭シャラフ・アル・ディーンを尊敬し、貧民の賑恤に心を配り、自ら運河掘鑿のシャベルを揮うなど人心の收攬に努めたので、彼の善政を聞き傳えてホラサンの各地から續々人々がヘラートに流れこんだ。この年人口調査を

した處、老若會わせて六九〇〇人あつた。マリク・マジュードは己の權威が高まると、モンゴルの諸王家の代表者たちにも厳しい態度で接した。一二四一年(A. H. 639)にチャガタイ・ウルスの主エス・モンケの勅書を持つてシャラフ・アル・ディーン・ビチクチなる者がやつてくると、その勅書を奪い、この者をして空しくヘラートを去らしめた。一二四二—三年(A. H. 640)かねて機會を窺つてアミール・ムハンマドとカルグとは、新しいホラサン總督アルグン・アカにマリク・マジュードのことを讒訴した。アルグン・アカはマリク・マジュードを捕えて斬つた。ヘラート市民は彼の死を悼み、アミール・ムハンマドとカルグの行動を非とした。マリク・マジュードの子シャムス・アル・ディーン・カルユニーは一二四三—四年(A. H. 641)バト・カンより父の後繼者たることの承認を得、勅書、牌子、御衣を賜わつてヘラートに戻り、亡父の舊邸に入つた。翌年彼は再びバト・カンのもとに出かけた。留守居役のトルコ人傭兵隊長シャムス・アル・ディーン・ラチンは彼の不在中の己の不始末の發覺を恐れ、ヘラートに戻つてきたシャムス・アル・ディーンを毒殺して自らは逃亡した。

一二三六—七年にオゴタイ・カーンの復興命令が出されてから十年足らずの間にヘラート市では人口が増し、生活が安定し、經濟的な立ち直りが見られた。これはヘラート人や知事たちの努力の成果である。然し一二四一年オゴタイ・カーンが崩ずると、モンゴル帝國內の政情は漸く不安となつた。その妃ドレゲネの稱制時代、グユク・カン亡き後の空位時代にモンゴルの諸王・貴族が被征服民に課した苛斂誅求は一般的な現象であつた。カーンの權威の失墜はオゴタイの任命したヘラート知事アミール・ムハンマドが、バトの任命した知事マリク・マジュードに容易に取つて代られたことに如實に物語られている。またオゴタイ・カーンの任命した司政官カルグが、マリク・マジュード、シャムス父子に對して從屬的な地位に甘んじたのも、バト・カンの威光を恐れたからに他ならぬ。元來モンゴル人には、財産は一族共有のものであるという考えがあり、ヘラートに就いてもカーンのみならず各ウルスの利益代表者がそこに常駐、或は使者としてやつて來た。特にバト・カン、ホラサンの初代總督チン・テムール、續くコルグズが何れももともとジュチ・ウルスに仕えていた者であつたこ



とから、ホラサン州に、従つてヘラート市に對して強い發言權を持つようになつた。少年時代を蒙古で過したマリク・マジユドはその間の事情をよく辨えていたのであろう。然しカーンの威信の回復を目ざす者がモンゴル帝國の元首になつた時、このような一王家の特權は許されない。

モンケ・カーンはオゴタイの歿落後、動ともすれば弛み勝ちであつたモンゴル帝國の紀綱を肅正し、祖業を繼ぎ、皇帝の威信を挽回しようとしていた。モンゴル軍の活動は各地で再び活氣を呈してきた。イラン方面の經營に就いてはアルグン・アカよりその地の實狀を具に聴取し、慎重な政策を練り、イランの土着諸侯の所領を安堵した。これは來るべきフラグの西征の下準備でもあつた。またモンケはカシュミール、インド方面の征服を計畫していた。彼には復興しつゝあつたヘラート市の軍事的政治的重要性は自明のことであつた。マリク・シャムスにヘラートを中心とする今日のアフガニスタンの地の統治權を委ねたのは、このような事情のもとに於いてであつた。マリク・シャムスがモンゴルの慣習に通じ、先代以來モンゴル軍に協力してきた實績はモンケの心象を好くしたことであろう。然も彼が

グール貴族の出身であることは、これまでのヘラート知事イズ・アル・ディーン、アミール・ムハンマド父子が織物工の長に過ぎず、マリク・マジユド、シャムス・アル・ディーン父子がカルユン域の富人の出であつたことに比べれば、ヘラートを中心とするグール朝舊領土を統べる首長として遙かに相應しい人物と考えられたに相違ない。なおジュヴァイニーがマリク・シャムスもアルグン・アカの隨行者の一人であるかの如くに言つてゐるのは正しくないが、マリク・シャムスは當然總督アルグン・アカ——元史(三卷)によつて言えば阿母河等處行尚書省事阿兒渾——の管轄下に入るべきであつた。この後のマリク・シャムスは専らモンケ・カーンの勅書を奉じて、上述の地域の民を己の統御下に置き、彼等をモンゴルの權威に服せしめることに邁進したのであつた。

## 二 マリク・シャムスの活動

モンケ・カーン在世中のマリク・シャムスの主なる活動は、ヘラート入城、ヘラート近隣の諸首長の招撫、シースタン出兵、アフガニスタンで作戰であつた。これはモン

ケの勅書の趣旨の實現であり、西征軍を率いてイランに來たフラグ・カンへの全面的な協力であつた。然も注意すべきは、その間にマリク・シャムスが抜くべからざる勢力を培つたことである。その模様を述べてみよう。

マリク・シャムスはモンケより、御衣、金牌三、黄金・寶石を鑲めた帶二、金欄九、銀貨三千ディナール、インドの劍、ハットの槍、フアリードウーンの權標、犀利な短劍などの恩賜品を得、新たに司政官に任ぜられたジャーフーを伴なつてヘラート歸還の途に就いた。アム川を渡り、パドギスに來て、ヘラート市には入らずにフーシャンジュを経てトウースに至り、ここでモンケの命令によつてアルグン・アカより五萬ディナールを受取り、その後ヘラートに向つた。メシェッドまで來ると、屈強の者二十人を選んでヘラート市に先行させ、シャラフ・アル・デーン・ビチクチを逮捕させた。彼はかつてエス・モンケの勅書を携えてヘラートに赴き、當時の知事マリク・マジユドに追い返された者であるが、この時はアルグン・アカの徵稅官としてヘラートにいた。マリク・シャムスはヘラート入城後、シャラフ・アル・デーン・ビチクチをヘラート人とグルー

ク人にと對する誅求の廉で杖打百を喰わせ、ついで處刑した。これはアルグン・アカの命令に従つたとしか考えられないが、この嚴しい處置はヘラート人を驚かすに十分であつた。

ヘラートでは、マリク・マジユドの子シャムス・アル・ディーン亡き後、再びアミール・ムハンマド、カルルグ、ニザーム・アル・ディーン・バンダヒーが夫々知事・司政官・徵稅官として統治していた。マリク・シャムスはジャームに來ると、アミール・ムハンマド、カルルグのもとに使者を遣り、己のヘラート入城を出迎えさせた。ついでモンケの勅書を読み聞かせ、これに服すべきことを誓わせた。アミール・ムハンマドとカルルグとは自ら安んぜず、保身の策を講ぜんとしたが、この謀議は忽ちマリク・シャムスの耳に入つた。彼はアミール・ムハンマドを捕えて二千ディナールを取上げた。また、ヘラート破壊の際モンゴルの將バイナルは圍の中に逃げこんだ者千人を助命したが、彼等は「圍の人(haiin)」と呼ばれて代々免租の特權を認められてきた。マリク・シャムスはこの特權を剝奪した。司政官カルルグは「私がこの町に來た頃、ここには百

人とはいなかった。今日まで努力し多くの苦勞を重ねたので、このように民が集まつてきた。貴下はこれらの人々を殺したり、打つたり、罰金を科したりして四散させようとするのか」と抗議したが、マリク・シャムスは使者をモンケのもとに遣わして、カルグが老いて飲酒に耽るのみである<sup>と</sup>と告げ、新しい司政官の派遣を要請した。彼はこのような高壓的な態度でアミール・ムハンマドとカルグの支配體制を一舉に覆えそうとしたのである。然しアミール・ムハンマドとは妥協せざるを得ず、彼を許して、ヘラート政廳のことを委ね、シャムス・アル・ディーン・ババーリなる者を徴稅官に任じ、ニザーム・アル・ディーン・ウーブヒーを登用した。後の二者の経歴は不明であるが、この後ヘラート市民の代表者としてマリク・シャムスに仕えた。マリク・シャムスがモンケ・カーン即位以前からのモンゴル政權の代表者達をヘラート市から一掃しようとしたのは、モンケやアルグン・アカの意圖に従つたものである。然し彼はヘラート人とは摩擦を避け、ヘラート市民のために寺院の廣場や道路にアーチを造り、また前徴稅官ニザーム・アル・ディーン・バンダヒーが己の邸を修道院と

し、自分の財産をこれに寄進し、奴隸二十人を解放するなどして恭順の態度を示すと、彼に免租の特權を授けたのであつた。なおマリク・シャムスのヘラート市入城の年に就いて、サイフィーは一二四八年(A.H. 646)のこととしているが、これは信ずるに足らず、ホラサン總督アルグン・アカの歸任前後、即ち一二五三年の春又は同年末ではなかつただろうか。

翌年、マリク・シャムスはモンケの勅書によつてヘラート近隣の諸首長に己のもとに來るべきことを説いた<sup>初</sup>。彼の招撫に應じてヘラートにやつて來た者は、タリカンのファフル・アル・ディーン、ジュルジヴァンのシャムス・アル・ディーン、トゥーラクのイズ・アル・ディーンとフサーム・アル・ディーン、アーザーブのタージュ・アル・ディーン・アリー・マースード、ファラーフのタージュ・アル・ディーン、イスフィザールのフサーム・アル・ディーンとシャムス・アル・ディーン、フラーフのマジユド・アルズ、シースタンのアリー・マースードとナシル・アル・ディーンであつた。これらの地域のうち、トゥラク、アーザーブ、ファラーフ、イスフィザール、シースタンの位置に就

いては前に述べた。タリカンはバーラー・ムルガープ東方のヴァーリー城に比定され、ジュルジヴァンはタリカンの東方で、カイサル川東支流の上流域を指す。フワーフはバーハルズの南にあり、現在も同名の地である。これらの地域はモンケの勅書に示されているマリク・シャムスの統治權行使範圍に含まれている。これらの諸首長のなかからこの後マリク・シャムスの手足となつて働いた者が出た。ただガルチスタンのマリク・サイフ・アル・ディーンのみは、「自分も亦チンギス・カン家よりの勅書を持つてゐる」と言つて入朝を拒んだ。マリク・シャムスは直ちに兵を送り、アルグン・アカの協力を得て彼を殺した。アルグン・アカよりは「ヘラート七郡」(chinan)のマリク、アミールは誰もマリク・シャムス・アル・ディーンの命令に違ふな」という金印狀(altamgha)を得た。かくしてヘラート川とムルガープ川との流域一帯の地及びシースタンはマリク・シャムスの統轄下に入つた。

間もなくシースタンの主アリー・マスードとの間に紛争が起つた。「シースタン史」によれば、一二五五年(A.H. 653)マリク・シャムスはシースタンに入り、たまたまフ

ラグ西征軍の先鋒キトブカ・ノヤンのもとから歸つてきたアリー・マスードを殺害し(一二五五年三月四月)己の代官を置き、その後フラグ・カンのもとに赴いたという。紛争の原因は不明であるが、この後シースタンとの軋轢は絶えず、一二五八年マリク・シャムスは再びシースタンに侵入したが、二年後にはかねて叔父の仇を報じようと畫策していたアリー・マスードの甥ナシール・アル・ディーンがフラグ・カンより勅書を得て、シースタンに歸還し、マリク・シャムスの代官を放逐した。マリク・シャムスは一二六三、一二六五の兩年にもシースタンに出兵した。後に述べるように、一二六五年アバガの即位に當つて、ニームルーズ(シースタンの別名)はマリク・シャムスの統治に委ねられたといふから、彼のシースタン制壓はこの頃に成つたのであらう。一二五五年マリク・シャムスはサマルカンドに急行して、その郊外カン・イ・グルの草地に西征軍の總帥フラグ・カンに謁した(月十二)。フラグはイラン諸侯のうち誰よりも早く出迎えたマリク・シャムスを厚く遇した。ラシードによれば、この時フラグは「ヘラート、サブザヴァール、グル、ガルチエ(ガルチエ)の統治權」を彼に委ねたといふ。

これはモンケ・カーンの勅書の再確認を意味する。マリク・シャムスがアム川を北に渡つてフラグの軍營を訪れたのは、勿論その西征に全面的な協力を誓うためであつたが、それと共にシースタン首長アリ・マスード殺害を釋明し、モンケの勅書の再確認を求めるためであつたと考えられる。西征本軍がホラサン州に入ると、マリク・シャムスはフラグの命を受けてクヒスタン州のサルタフト城に使い、ナーシル・アル・ディーン・ムフタシャムを説いて、彼をフラグのもとに來降させた<sup>(四)</sup>（一二五六年四月十二日）。この後フラグの本軍には後述するように、この頃カルルグに代つてヘラーの司政官となつたメルキタイなる者が屬從し、マリク・シャムスは別の方面で活躍した。これが彼の『アフガニスタン』作戦である。

マリク・シャムスの『アフガニスタン』作戦に就いては、サイフィーのみが詳細な記事を傳えている<sup>(五)</sup>。今その大要を述べれば次の通りである。

〔一二五〇一年 (A.H. 648)〕マリク・シャムスは己の親族タージュ・アル・ディーン・ハールにヘラーの留守を命じてヘラートを出發し、軍兵を徴しつつ、イスフィザール、ファラー

フを経て居城ハイサルに入つた。ここでグル兵を集め、テギナードに向つた。

〔一二五一年 (A.H. 649)〕この頃テギナード附近にはハルカト・ノヤン、タンクルタイ・ノヤン麾下のモンゴル軍が駐屯していた。マリク・シャムスはこのモンゴル軍との協力體制を作り上げた。

〔一二五二年 (A.H. 650)〕マリク・シャムスはハルカト・ノヤンの賛同を得た上で、司政官ジャーフィーに己の腹心二名をつけ、モンケ・カーンの勅書とアルグン・アカの金印状との寫し及び自分の書簡を携えさせて、『アフガニスタン』に派遣した。ジャーフィーの一行はマストウングに至ると、その首長ジャーヒンシャーに降伏を勧めた。ジャーフィーの復命でジャーヒンシャーの態度が曖昧なのを知ると、マリク・シャムスは『アフガニスタン』に侵入した。

〔一二五三年 (A.H. 651)〕時にマストウングでは首長ジャーヒンシャー、その子バフラームシャー、ジャーヒンシャーの女婿ミラーンシャーの三人のクルド人が權力を握つていた。ミラーンシャーの弟タージュ・アル・ディーン・クルド（以下タージュ）はかねて兄と争つていたので、マリク・シャムスに來降し、帽、衣、陣幕、劍、權標、馬を授けられ、アフガン軍の指揮を委ねられた。彼に續いてアフガン人の首領達が多く來降した。

〔一二五四年 (A.H. 652)〕これに力を得てマリク・シ

ヤムスはマストウング市を包圍した。これより先シャーヒンシャー、バフラームシャー、ミラーンシャーは五千の兵を以つてハーシャク城に籠つた。マリク・シャムスはマストウングの町をタージュ・クルドに委ね、自らハーシャク城を包圍すること三ヶ月半、ミラーンシャーが血路を開いてシースタン方面に脱出した後、これを陥落させた。

〔一二五五年 (A. H. 653)〕 先に來降したフサーム・アル・ディーン・ジャールウルの親族アルマールが「ダイル・バートル、カラ・ノヤン等も我がティーリー城を攻めて爲す所なく退いた」と豪語しているのを聞くと、マリク・シャムスはこれを圍むこと五十九日、遂に陥れた。アルマールを斬つた後歸還の途に就き、三千の兵をテギナーバードに留め、自らはハイサール城に戻つた。アフガン人の一首領シュアイブは、マリク・シャムスの銳鋒を避けてカシュミールに避難していたが、再びカシュミールを出て、テギナーバードの駐屯軍を襲ひ人馬を殺傷し、カヒーラー城に籠つた。これを聞いたマリク・シャムスはハイサール城を出てアフガニスタン<sup>ニ</sup>に向ひ、カヒーラー城を攻撃すること四十六日、城内の和平派のために軛をかけられて連行されてきたシュアイブを自らの手で斬つた。

〔一二五六年 (A. H. 654)〕 シュアイブの従弟シンダーンはマリク・シャムスに降り、既に一年間その軍中にあつたが、シュアイブの斬られるのを目撃して自ら危ぶみ、一千の兵を率いてド

ウーキー城に走つた。マリク・シャムスはタージュ・クルドを遣つて降伏を勧めたが無駄であつた。激戦二十二日、夜襲によつてやつとドウーキー城を占領した。シンダーンは亂戦のうちに死んだ。

〔一二五七年 (A. H. 655)〕 マリク・シャムスはアフガン人からドウーキーの南<sup>(東の誤)</sup>七〇ファルサングの地方で七百人ばかりの盜賊の群がインドとの交通路を脅しているのを聞き、これを鎮定した。かくてアフガニスタン<sup>ニ</sup>を略鎮定し終ると、ヘラートに歸還しようとしたが、タージュ・クルド等の要請を容れて、サージー城の攻撃に向つた。クンクルタイ・ノヤンより二千の援軍を得てサージー城を陥れた。

〔一二五八年 (A. H. 656)〕 マリク・シャムスはアフガニスタン<sup>ニ</sup>よりテギナーバードを経てハイサールに入り、イスファールからヘラートに歸還した。その後シースタンに出兵した。

〔一二五九年 (A. H. 657)〕 マリク・シャムスはまたアフガニスタン<sup>ニ</sup>に赴き、バカル城に向つた。バカル城は河中の岩の上にあつた。大船三〇、小船百を以つて攻めたが成功せず、結局一萬ディナール、織物十荷、アラビア馬五頭、奴隸五十人を得て引き上げた。

〔一二六〇年 (A. H. 658)〕 先にハーシャク城を脱出してシースタンに走つたミラーンシャー等がエジプトに行こうとしてマストウングに來た。鎮守の將ムハンマド・ナヒーは彼等にエジ

プト行きを中止して、降伏することを勧める一方、秘かにマリク・シャムスに彼等の處置を仰いだ。マリク・シャムスの命令でミラーンシャー等は殺された。

〔一二六一年 (A.H. 659)〕 マリク・シャムスの冷酷な態度に身の危険を感じたタージュ・クルドは、テギナーバードからアム川方面に走り、ジュチ・ウルスの主ベルケ・カンの宮廷に赴いた。ベルケよりマストウングに對する統治權委任の勅書と牌子を得て歸途に就いたが、グルル兵に捕えられテギナーバードに連行された。親族の執成しでハイサルルのマリク・シャムスのもとに送られるのを免れて、マストウングに遣られた。ここでマリク・シャムスの任命した知事シバフグラーを殺してマストウングの主となつた。

〔一二六一年 (A.H. 660)〕 マリク・シャムスは、アバガとトプシンとのニグダル追撃を助け、ニグダルがマストウングに入るのを遮ろうとしたが成功せず、ハイサルル城を経てヘラートに歸還した。

以上、サイフィーの「ヘラート史記」によつて、マリク・シャムスのアフガニスタン作戰を概述したのであるが、そのクロノロジーは信用し難い。マリク・シャムスは一二五六年四月まではフラグ・カンと行動を共にしており、それより以前に、アフガニスタンに出兵できる餘裕はなかつたはずである。一二五八年にはシースタンに出兵している。従つてサイフィーが述べているマリク・シャムスの出發(一二五〇)からサージー城占領(一二五七年)までのことは、一二五六、一二五七の兩年のことと考へべきであらう。事實、ファシーフはマリク・シャムスのアフガニスタン作戰の主目的であつたシャーヒンシャー、バフラームシャー父子の討滅を一二五七年 (A.H. 655)——サイフィーによれば一二五四—五年 (A.H. 652)——の條にかけているのである。またサイフィーが一二五九年 (A.H. 657) から一二六一年 (A.H. 660) の間のこととしているマリク・シャムスのアフガニスタンに於ける行動も果してこの通りであつたかどうか疑念なきを得ない。例えば、サイフィーが一二六〇年 (A.H. 658) のこととしているミラーンシャーの死を、ファシーフは一二七〇—一年 (A.H. 669) の條で述べている。かくてマリク・シャムスのアフガニスタン作戰は一二五六、一二五七の兩年に主目的を果した後も、一二六〇年代を通じて斷續的なされたと考えられる。

アフガニスタン作戰の記事に見られる地名のうち、

マストウング (Mastung) はパキスタンのクエッタの南方約四五軒、ドゥッキー城 (Duki) はクエッタの東方約一八〇軒にあり、今日の地圖上にその所在が確められる。ティリー城 (Tiri) はマストウングの北方約一〇軒の町かと考えられるが、確かではない。ハーシャク城 (Khashak) はヤークトの「地理事典」にマ克蘭州に在りというが、その位置は未詳である。バカル城 (Bakar) はインダス川中の城塞であるといわれているが、その正確な位置は知り難い。カヒーラー城 (Kahira) とサージー城 (Saji) とはその位置を比定する手掛りがない。然しこれらの地名を通じて、マリク・シャムスの作戦區域がマストウングを中心にスレイマン山脈からインダス川に及び、バルチスタン、マ克蘭兩州を蔽うものであつたことが推察されよう。それはモンケ・カーンの勅書に「アフガニスタン、インダス河岸とインドの境まで」とある地域に相當するものであつた。マリク・シャムスはデギナーバード (カンダハル) を前進基地として、マストウングからカラートに進出を試み、またドゥッキーから東してインダス川流域に出ようとしたのである。これらのルートはヘラート、シースタンからインダ

ス川流域に通ずる最短路であり、マリク・シャムスは所謂「バルチスタンの門」を確保しようとしたのである。また考えてみると、チンギス・カン軍のホラサン侵入の際、ヘラートの主アミーン・マリクはブスト、デギナーバード方面で追跡してきたモンゴル軍をふりきり、シヴィスタン(現在の)を経てクスダル(現在のフ)に走つたことがあり、ホラズムの王子ジャラール・アル・ディーンもインドからイランに歸還した時、インダス川河口からバルチスタンを経てケルマンに向つた。その後デギナーバード方面に駐屯していたモンゴル軍はマストウングに侵寇したが成果はなかつた。マリク・シャムスが始めてこの地域を鎮定し、インドからヘラートへ、或は南イランに通ずる交通路を確保したのである。これはアラムートの暗殺教團や、バグダードのアッバース朝がこの路線によつてインドと連絡するのを遮断し、以つてフラグの征服戦を側面から擁護したものと考えざるを得ない。そして恐らくはサリ・ノヤンのインド侵入(一二五七年十一月)と呼應してなされたものであろう。またマリク・シャムスのアフガニスタンに於ける活動を、ゲール人の伝統的な政策であつたインドへの南進運動と見るこ



ともできよう。この後マリク・シャムスが再びマストウン方面に出兵した形跡はないが、サイフィーによれば、一二六七—七八年(A.H. 666)アフガニスタンのティラーフの諸城を陥れたという。ティトラーフはベシャヴァルの南の山地でアフガン人の住地としては北端であつた。因みに我々はマリク・シャムスのアフガニスタン作戦によつてアフガン人の所在や活動を始めて具體的に知り得るのである。かくてアフガニスタン作戦の終結を以つてマリク・シャムスはモンケの勅書により統治權の行使を許された全地域を己の統轄下に置く事業を成就したと言えよう。アルグン・アカの協力、モンゴル軍の援助はあつたにしても、彼はこの事業をグル兵を使つて殆んど自力で成し遂げた。

アフガニスタンより歸還したマリク・シャムスはヘラート市に於ける己の支配體制を強化する必要を見出し、このために數年を費した。これと同時にヘラート復興政策を推進した。一二五九年モンケ・カーンが殂落し、イランにフラグ・カンによるイルカン政權樹立という新事態が生ずると、マリク・シャムスの立場もモンケの在世時代に比

べて幾分異つてきた。マリク・シャムスはモンゴル人間の權力鬭争には極めて慎重な態度を取り、常に主流の勢力に服してきたが、その態度を崩して身を滅ぼすに至つた。次にこれらの事情を探つてみよう。

マリク・シャムスはアフガニスタン作戦出發に當つて、親族のタージュ・アル・ディーン・ハール(以下タージと略)を己の代理者としてヘラートに留めた。彼の司政官カルグに對する罷免要求がどのように處置されたかは不明であるが、ラシードによれば、一二五六年九月二日ヘラートの司政官メルキタイなる者がフラグ・カンの命を受けて、暗殺教團の主ルクン・アル・ディーン・フルシヤールのもとに使っているので、この頃までにメルキタイがヘラートの司政官に任ぜられたのであらう。もつともサイフィーによれば、ホラズム人メルキタイがモンケ・カーンによつてカルグの後任の司政官に任命されたのは一二五八年(A.H. 658)のことであるという。メルキタイはフラグの本軍に扈從してバグダード攻略戦(一二五八年)に参加しているので、そのヘラート着任の年はサイフィーの如くであるかもしれない。なおマリク・シャムスには、モンケによ

つて任命されたジャーフーという司政官がいて、アフガニスタン<sup>g</sup> 作戦に従軍していたことが知られているが、この者がヘラート市の統治に直接參與したという記事は見出し得ぬ。何れにしても、マリク・シャムスがアフガニスタン<sup>g</sup>より歸還した時、ヘラートでは留守居役のタージュ・ハールと司政官メルキタイとが統治していて、その下でシャムス・アル・ディーン・ババーリー、ニザーム・アル・ディーン・ウーブヒーが政廳のことを掌つていた。

メルキタイはバグダード占領の際敵將スレイマーンの娘を五千ディナールで贖つてきたが、これをタージュ・ハールに與えてその歡心を求めた。一二六二年<sup>師</sup>三年 (A.H. 661) タージュ・ハールとメルキタイの兩人はシャムス・アル・ディーン・ババーリーをフラグの第六王子で、當時ホラサンにいたトブシンのもとに遣つて、マリク・シャムスがニクダルと氣脈を通じ、チャガタイ・ウルスの諸王と通謀していると讒訴した。翌一二六三—四年<sup>師</sup> (A.H. 662) トブシンはサラフスよりクースエに來て、マリク・シャムス等を召喚した。然しマリク・シャムスの辯明を聞いて、讒訴が根據のないのを知り、タージュ・ハールとメル

キタイとをいわれなき告發の廉で有罪とし、その處分をマリク・シャムスに一任した。メルキタイはトブシンの諸將に厚く賂して罪を免れたが、タージュ・ハールはマリク・シャムスの監視下に置かれた。マリク・シャムスは強いてタージュ・ハールを處刑する所存はなかつたが、彼の子ルクン・アル・ディーンが獨斷でタージュ・ハールを殺害してしまつた。一二六四—五年<sup>師</sup> (A.H. 663) アバガがヘラートの新設工場を見に來た時、マリク・シャムスは己に對する讒訴事件を告げ、メルキタイが賄賂によつて罪を免れていることの非を主張した。アバガはこの裁判をサラフスに於いて行なうことを約した。一二六五—六年<sup>師</sup> (A.H. 664) アバガは司政官メルキタイに杖打七十七の判決を下し、罷免した。マリク・シャムスは二十五打を減じて刑を執行した。またシャムス・アル・ディーン・ババーリーを讒訴に加擔した籐で杖打三十七に處した。この後己の信任するジャラール・アル・ディーン・ガズナヴィーなる法官に收賄の事實があるのを知ると、彼に杖打百五十を加えて死に至らしめた。マリク・シャムスはこのような嚴しい態度を持して、己の反對者を排除し、ヘラートに於ける己の權力を

強化した。

またマリク・シャムスはヘラートの復興こそ己の本来の使命と考えていたので、彼の復興政策は極めて積極的であった。始めてヘラート市に入城した時、市民を集めてヘラート市内を復興すべきことを説いた。これまで復興作業は専ら郊外に於いてなされていたのであり、舊市街の復興はモンゴル人の禁ずる所であつた。市民達は市内に塔、城塞、濠を構築したりすれば、モンゴル人の疑惑を招く虞れがあると言ひ、これを時期尚早とした。然し彼の舊市街再建の志は固く、一二六四—五年(A. H. 663) アバガの命令でヘラートに工場と市場を建てることになつた時も、メルキタイたちが郊外に建設すべきであると言つたのに、マリク・シャムスは市内に建てるのがよいと主張した。もつともこの時も彼の主張通りにはいかず、ホラサンの各地から職人・大工が集められると短時日の間に町の南面に工場が建てられ、それに向ひ合つて市場が設けられた。この工場(Karkhāna)は勿論織物工場であつたと考えられる。また對バルケ戦より歸ると(一二六七—一七八年)四カ月間ヘラート市に留まつて、寺院、橋梁、驛舎、貯水池建設などの土木工事を

興した。市民の福祉政策をも疎かにせず、例えば五千ディナールを支出して貧民救済をしたことがある。このような支配體制の強化と復興政策の推進によりマリク・シャムスのヘラートに於ける權威は揺がないものとなつていつた。彼の統治下にヘラートは富力を増し、後に述べるように、バラクの侵入時にも市民は動搖せず、アバガがヘラート市を直轄領に編入しようとした時には、これを挫折させたのであつた。

次にマリク・シャムスのイルカン政權に對する關係を考えてみよう。彼がフラグ・カンを眞先に出迎え、その後はモンケ・カンの勅書を奉じてフラグの作戰を側面から援護していたことは既に述べた通りである。一二六〇年三月ダマスクスを降伏させていたフラグのもとにモンケの計が傳えられると、フラグの立場は一變した。一旦は東歸の志を抱いたが、これを捨てイランの地に留まる決意をした。西征軍の總帥からイルカン政權創立者となつたのである。このような立場の變化はフラグとマリク・シャムスとの關係にも何等かの變化を生ぜしめたのであろう。ヴァッサーフによれば、一二六〇年(A. H. 658)マリク・シャムス

はフラグの怒りを買ひ、二度までも軍を差向けられ、これを退けはしたが、後降伏して恩賜を蒙り、やがて自らフラグのもとに赴いて辯明し、ベルケ・カンとの戦に参加して、その勇敢さを認められたという。このヴァッサーフの記事は他の史書に比較すべきものがないため、このままではやや確め難い点もあるが、フラグがマリク・シャムスに何等かの疑惑を抱いたのではないかとの推測を許す。然しマリク・シャムスの地位が動搖したとは考えられない。一二六五年フラグの長子アバガが即位すると(六月十<sup>九日</sup>)マリク・シャムスは新しいイルカンにより所領を安堵された。この時のことをラシードは

「ニームルーズ國をマリク・シャムス・アル・ディーン・クルトに委ねた」

といひ、ミールホーンドは

「ヘラートとシースタンの統治權をマリク・シャムス・アル・ディーン・クルトの掌握下に置いた」

という。勿論ニームルーズ、乃至はヘラートとシースタンを以つて、マリク・シャムスの所領全土の表現に代えてゐるのであつて、文字通りにこれらの地域に彼の統治權が限

定されたと考ふべきではない。この所領安堵は、他方から言えば、マリク・シャムスが大カーンではなくて、イルカンの主權の下に置かれたことを意味する。

マリク・シャムスは恐らくアバガの即位式に参列していたものと思われる。何者、即位式直後ジュチ・ウルス軍侵入の報が入り、王弟ヤシュムートが邀撃に先發し(七月十<sup>九日</sup>)、續いてアバガも出陣してクル河を北に越えたが、この對ベルケ戦にマリク・シャムスも奮闘したからである。マリク・シャムスがベルケと戦う理由は十分であつた。かつてバトの臣がバドギスから珍獸をその君主のもとに送ろうとして驛馬をヘラート市に求めた處、マリク・シャムスはこれを拒否した。これを聞いたバトは當時マーザンダーン州にいた一族のブルガルにマリク・シャムスの逮捕を命じた。その後もマリク・シャムスはブルガル、トゥタルの使者と争つたことがあつた。然もこのブルガルのフラグによる處刑、トゥタルの急死がジュチ・ウルスとイルカン家との不和の直接の原因であつた。デルベンド方面に於けるマリク・シャムスの拔群の働きはサイフイーの特筆する所である。敵將ノガイは傷つき、ジュチ・ウルスの主ベルケは陣

歿して、イルカン國軍は大勝した。マリク・シャムスはアバガより寶輿、エジプト製武器、勅書、牌子、太鼓、旌旗などの恩賜品を得てヘラートに歸還した。かくてマリク・シャムスとイルカン家との關係は順調に保たれていくかに見えた。然るに思わぬ事件が起り、マリク・シャムスは去就に迷つて判斷を誤り、アバガは疑惑を蒿じさせて憤激し、遂にマリク・シャムスは己が身を破滅させるに至つた。その事件とは、チャガタイ・ウルスの主バラクのホラサン侵入である。

一二六九—七〇年 (A. H. 668) バラクはカイドの支持を得、大軍を率いてアム河を渡るや、マルチャクでホラサン太守トブシンの軍を破り、タリカンに進み、一軍を以つてニシャプールを陥れた(一二七〇年五月二十九日)。更にヘラートを攻略させようとしたが、部將クトルグ・ティムールは「ヘラートの主マリク・シャムスを倒せばイランの諸侯が我々から離れるかもしれぬ。彼を説いて召すに如くはない」と言つて、ヘラートに赴き更にハイサル城に行つてマリク・シャムスに面會し、「事成ればホラサン全州を汝に授けよう」と約した。マリク・シャムスはクトルグ・ティムール

に伴われてバラクに謁した。バラクはホラサン州を委ぬべきを約し、改めてホラサン州の富人の名をすべて書き出すことを命じ、更にヘラートの富人より財物、武器、家畜を徵發させようとした。マリク・シャムスはバラクの軍營に留まること八日、ヘラートに歸ると市民に生命・財産が安全でないことを告げた。一方アバガはバラク軍を撃退すべくアゼルバイジャンを發した。タルマガルなる者を遣つて、トブシンの召集に應じないばかりか、バラクに降つたマリク・シャムスを捕えさせようとした。マリク・シャムスはこれを知つて、直ちにハイサル城に走つた。タルマガルは彼を追跡したが及ばなかつた。アバガはヘラート市を破壊せよと命じたが、後その命令を撤回し、使者をヘラート市の留守居役シャムス・アル・ディーン・ババーリーに遣つて、バラク軍に城門を開くなと命じた。その後ヘトルキスタン總督マスード・ベクがヘラート市にやつて來たが、ヘラート人は彼に城門を開かなかつた。やがてアバガの軍はバラクの油斷に乗じて大勝し、侵入者をアム川の北に追い返した。

マリク・シャムスの行動はこの場合彼としては已むを得

ざるものであつただろう。忽ちにしてホラサン州全土を席卷したバラクの言分を聞かなければ、ヘラート市は破壊されたであろう。然しこれはアバガの眼には許すべからざる裏切行爲と映つた。バラクを撃退した後、「若しもヘラートに人がいなかったらバラクも軍をこの地方に入れなかつたであらう。町の住民をホラサンの各地に移すべきである」という意見に傾き、ヘラート市を破壊させようとした。然しホラサン太守トブシン、宰相シャムス・アル・ディーン・ムハンマド・ジュヴァイニー(以下宰相シャムスと略稱)はその不可を説き、「マリク・シャムスを敵に廻せば、我が軍はインド、トルキスタンからの攻撃にさらされ、ホラサン州は危い。彼は奇計多く勇敢であり、グルルの山は險しく、彼の居城ハイサルは攻むるに難い。優詔して彼の恐怖心を除くに如くはない」と主張した。そこでアバガはトブシンに諮つて、マリク・バルバーンなる者をヘラート知事に、近臣ウラド、トガイ兩名を司政官に任じてヘラートに送りこんだ。サイフィー(Cob)はこれを二七〇一年(A.H. 666)のこととす(Cob)。マリク・バルバーン等はヘラート市に入ると民心の安定に努めたが、マリク・シャムスが軍を

率いて入城するという噂に不安を抱いた。

一二七一年(Cob) (A.H. 670) マリク・シャムスはアバガのもとに出向くべきか否かを腹心の部下達と相談したが、なお一、二年静観することにし、子マリク・トウルクにバフラヴァーン・ジャマル・キーナーニー、ヒザブル・アル・ディーン・グルル兩名をつけて、ホラサン太守トブシンのもとに遣つた。トブシンはマリク・トウルクをマリク・シャムスの後繼者とし、ヘラートの統治權を委ねた。(Cob) マリク・トウルク等はヘラートに入つて大いに歓迎され、前知事マリク・バルバーンは罷免された。(Cob) マリク・トウルクはヘラート統治に當つて、父マリク・シャムスに逐一報告を送り、父の來城を希望した。

然し翌一二七二年(Cob) (A.H. 671) にアバガはマリク・バハー・アル・ディーン・マジナーニーなる者をヘラート知事に任じ、アクブカ、ナジブ・ニアールをしてヘラート市の戸口調査をさせた。マリク・バハー・アル・ディーンは安撫政策を取り、ヘラート市の有力者シャムス・アル・ディーン・ババーリー等と協力した。このためホラサンの各地から人々がヘラートに移つてきた。

一二七三—四年<sup>(108)</sup> (A. H. 672) アバガの宮廷から更にアミール・スンジャク、アフマド、ヴァジーフ・アル・ディーン、マリク・ジャラル・シムナーン等がヘラートの戸口調査にやつて來た。ヘラートの市民は四區分され、アジーズ・アル・ディーン・シハープスク、マスード・シャムス・アル・ディーン・ハージ、アブー・パクル・ディーン・バーニの如き町の有力者が區長になつた。

サイフィーは、一二七四—五年 (A. H. 673) アバガやトブシンからの誅求がなく、ヘラート市民は安穩を樂しんだといふ<sup>(109)</sup>。このようにして、アバガはマリク・シャムスに對して強行策を取らず、むしろヘラート市の直轄領編入を計畫し、マリク・シャムスは恭順の態度を示しつつも、居城ハイサルに籠つていた。かかる兩者の關係が却つてヘラート市に平和を齎したのであつた。

然しアバガはマリク・シャムスの裏切行爲を忘れたわけではなかつた。一二七五—六年<sup>(110)</sup> (A. H. 674) マリク・シャムスに優詔して彼をハイサル城から出すべき策を取り、使者を遣つて勅書、牌子、御衣を授け、「ヘラートに來て、アフガニスタン<sup>(111)</sup>よりシュブルガン、アム川に至る

地を治めてはどうか」と誘つた。マリク・シャムスはこれに應じて、殆んど七年ぶりにハイサル城を出てヘラートに入つた。アバガは軍を出して一舉に彼を捕えようとした<sup>(112)</sup>が、宰相シャムスはホラサン州の荒廢の現状からして兵を動かすことの不可を説き、自分の子で當時イスファハン知事であつたバハー・アル・ディーンをして必ずマリク・シャムスを宮廷に連れ來らすことをアバガに約した。

一二七六—七年<sup>(113)</sup> (A. H. 675) バハー・アル・ディーンはヘラートの法官ファフル・アル・ディーン、ニザーム・アル・ディーン・ウーブヒーと相談し、マリク・シャムスに安心して宮廷に來るように書簡を以つて勧めた。宰相シャムスの書簡もこれに添えられた<sup>(114)</sup>。これに心を動かされてマリク・シャムスはヘラートを立ち、イスファハンに至つてバハー・アル・ディーンに合し、首都タブリーズに到着した。然るにアバガの態度は聊も軟化しておらず、宰相シャムスの諫言の口を封じ、アミール・テグネの執成しを聽かず、マリク・シャムスをタブリーズの牢に幽閉し、その子ルクン・アル・ディーンと弟とをデルベンドの軍役に遣つた。遂にマリク・シャムスを毒殺させた。一二七七年十

二月乃至一二七八年一月 (A. H. 676, Sha'hān) のことであつた。<sup>(114)</sup> アバガはなお安心せず、検屍を命じてその死を確認させ、棺を釘づけにし、これをシャームに埋葬させた。

然しアバガの處置は宰相、重臣の抵抗なしに行なわれたのではない。アバガの胸中には、この危険人物を除去した上は、ヘラート市を直轄領とし、マリク・シャムスの全領土を奪おうという意圖が動いていたかもしれないが、それは困難であつた。一二七八—九九年 (A. H. 677) ホラサン太守トブシンの發議で、マリク・シャムスの子ルクン・アル・ディーンがデルベンドから召還され、父の後繼者に選ばれた。名もマリク・シャムス・アル・ディーン・イ・キヒーン、即ち小マリク・シャムスと改むべきことを命ぜられた。小マリク・シャムスはアバガの任命した司政官キプチャクと共にヘラートに歸つた。<sup>(115)</sup> クルト家はマリク・シャムスの死を以つて滅びず、その子小マリク・シャムスの努力によつていよいよその勢力を伸張することになつた。

### むすび

アバガ・カンがマリク・シャムスを倒したのみで、彼の

所領に手を觸れ得ず、クルト家の存續を許さざるを得なかつた事由の考察を以つて、この小論のむすびに換えよう。

先ずモンゴル人側の事情から考えてみよう。トブシンと宰相シャムスとがアバガのマリク・シャムス討伐を不可とした理由の一つは、前に引いたように「マリク・シャムスを敵に廻せば、我が軍はインド、トルキスタンからの攻撃にさらされ、ホラサン州は危い」ということであつた。マリク・シャムスの領土は略今日のアフガニスタンの全域を蔽い、イランの防衛にとつて極めて重要な地域であつた。

歴代のイルカンは皇太子と目されている王子をホラサン太守に任じ、大兵を授けて東方の國境を固めさせるのを常とした。その防禦線はカスピ海東南隅のアスタラーバードからヘラートに達した。そしてヘラートからバルフ、或はカーブルに至る線の防備はまさにクルト家の擔當であつた。

チャガタイ・ウルスの侵寇に備え、且つインドに強い關心を持つていたイルカンにとつて、クルト家の歸趨は重大事たらざるを得ぬ。モンゴルの軍勢力を以つてすれば、アフガニスタンの地の破壊は可能であつたかもしれないが、その地を確保できないことは、チンギス・カン以來モンゴル人



のよく辨えていることであつた。ヘラート市の復興命令を出したオゴタイ・カーン、マリク・シャムスに勅書を授けたモンケ・カーンの目的は、イラン、インドへの征服戦を繼續するためであつたが、イルカンにとつてはこの地域の確保が自己防衛のために必要であつた。アフガニスタンの地を確保できる者を、マリク・シャムスの後繼者以外には見出し得なかつたのである。

次にマリク・シャムスの側の事情を考えてみると、彼は毒殺に遭うまでにその政權の基礎を固めてしまつていた。政權の基礎とは何か。またそれは如何にして築かれたか。第一にマリク・シャムスがモンゴル人の強大な武力支配下にあつてよく自己主張をなし得る人物であり、クルト政權の樹立者に相應しい器量、才幹を備えた人物であつたこと。彼の狡猾、勇敢は諸史料の一致して述べる所である。第二に彼がモンケ・カーンの勅書によつて己に授けられた地域を、殆んど自分の力で統轄下に置いたこと。アム川、ヘラート川からスレイマン山脈に至る廣大な地域の民が彼の權威に服した。第三にマリク・シャムスがグルル朝の復興者と見做されて、グルル人の支持を得たこと。彼の統轄

下に置かれた地域は略グルル朝の舊領に相當する。マリク・シャムスの婚姻關係を確める術がなく、また彼の手足となつて活躍した人々の分析を試る邊もないが、マリク・シャムスが己の政權の據り所とした武力は、山險によつて生來剽悍なグルル兵であつた。彼がグルル朝の復興者を以つて自任していたという史料こそ見出されないが、グルル貴族としての彼の活動は、ヘラート人の復興に對する烈しい意欲と同じく、その目標がグルル朝の再興にあつたと考えなければ理解し難い。かつてグルル朝は、ホラサンやマヴェランナフルのイスラム教徒にとつては正統イスラムの擁護者と仰がれたが、マリク・シャムスも異教徒モンゴル人の支配下にあつて、イスラム教徒の囑望を擔つていたと考えられる。何れにしても彼がグルル朝の復興者の役割を果たし、グルル人の武力を掌握し得たことは最も注意されねばならぬ。第四に首府ヘラートの經濟力が彼の政權を支える一つの柱となつたこと。ヘラートの經濟的發展の實狀は、その生産物や當時の隊商貿易との關係に於いて論ぜらるべきであるが、マリク・シャムスの積極的な復興政策によつて蓄えられた富は、バラクやアバガをして垂涎させるに十

分であつた。第五に彼がハイサル城という安全な避難所を持つていたこと。マリク・シャムスは己の権力が強大になればなる程、モンゴル人の疑惑を警戒しなければならなかつた。この目的のために彼の父祖傳來の居城ハイサルは究竟の場處であつた。このようにマリク・シャムスの器量、自分の實力によるグルル朝舊領の統轄、グルル人の支持、ヘラートの富、ハイサル城の險が相俟つて、彼の勢力を築き上げたと言えよう。アバガ・カンはこのことを無視し得ず、マリク・シャムスを死に至らしめても、クルト家を滅ぼすことができず、むしろクルト家の存続を必要とした事情が理解されよう。ここに我々はモンゴル人の武力支配の限界と、グルル人の底力を見出す。このことは單に政治現象に就いてばかりでなく文化現象に就いても言えよう。モンゴル人の武力が齎したホラサン州の荒廢は、そこに培われていたイラン文化の傳統を斷絶させようとした。グルル人——若干の方言の差はあるにしても本質的にはイラン人——の活動はその傳統を斷絶から救うものではなかつたか。クルト政權がイラン文化擁護の役目を擔つたことは、この後のクルト家の歴史が示す所である。

(一九六二・八・三〇)

(1) 註

クルト家の歴史に就いては D'Ohsson, Hammer-Purcell, H. H. Howorth などの書に概説あり、最近の著書に概説が E. G. Browne (A literary history of Persia, iii, 173-180), B. Spuler (Die Mongolen in Iran, 155-161), T. W. Haig (Encyclopaedia of Islam, ii, 830) などに書かれてゐる。

(2)

Juvayni = The Tārīkh-i Jahān-Gushā of 'Alā al-Dīn 'Atā Malik Juvayni, ed. by Mirzā Muḥammad Qazvīnī, 3 vols., Leyden & London, 1912-37. Boyle/Juvayni = The history of the world conqueror by 'Ala-ad-din 'Ata-Malik Juvayni, tr. by J. A. Boyle, 3 vols., Manchester, 1958.

(3)

Rashid, i, ii = Jami 'al-Tawārīkh of Rashid al-Dīn Fadl-Allāh, ed. by Bahman Karimi, 2 vols., Tehran, 1959. (良好なテキストと註をならす「蒙古史綱」を全部収めて便利である) Rashid, iii = Jami 'al-Tawārīkh, ed. by A. A. Ali-zade, Baku, 1957.

(4)

Isfizārī = Raudāt al-Jannāt fī Ausāf-i Madinat-i Harāt of Mu'īn al-Dīn Muḥammad Zamchī Isfizārī, ed. by Sayyid Muḥammad Kāzīm Imām, 2 vols., Tehran 1959-60. Isfizārī/Meynard = Extraits de la chronique persane d'Herat, tr. et annotés par C. Barbier de Meynard, Journal Asiatique, v, 16 (1860), 461-520; 17 (1861),









500 Fasîh (460a)  
 501 Fasîh, 460a.  
 400 Sayfî, 338-339. Fasîh, 460a.  
 502 Sayfî, 339. Fasîh, 461a.  
 503 Sayfî, 340.  
 504 Sayfî, 340-343. Fasîh, 461b-462a.  
 505 Rashîd, iii, 148.  
 506 Sayfî, 343-355. Fasîh, 462a.  
 507 Rashîd, iii, 149. Hâfîz-i Abîr, 381b.

508 Rashîd, iii, 150. Sayfî, 356-362. Isfizarî, i, 420-423.  
 Hâfîz-i Abîr, 384a. Fasîh, 462b. Mirkhwând, iv,  
 665-668. Khwândamîr, 369-370.  
 509 Sayfî, 362-367. Isfizarî, i, 424-426. Fasîh, 463a.  
 Mirkhwând, iv, 668. Khwândamîr, 370.